数理科学科図書室 －設立から半世紀のあゆみ－

内藤（ないとう）　美佳（みか）
（理工学メディアセンター）

1　はじめに

数理科学科図書室（以下「図書室」とする）は理工学部数理科学科の教員・学生を主たる利用者とする数学分野の専門図書室である。簡単に歴史をたどると，1974年，数理工学科が開設した翌年に数理工学科図書室として矢上キャンパス36棟に設立された。1977年，理工学情報センターから職員１名が出向し，以後継続して資料の整理と管理にあたる。1981年，数理工学科から数理科学科への改組に伴い，現在の数理科学科図書室という名称となる。図書室設立から48年を経て，数理科学科も2024年には50周年を迎える。

資料の購入費は数理科学科予算から賄われ，蔵書数は約４万冊，うち95％を洋書が占めている。図書室の運営・管理には理工学メディアセンター所属の嘱託職員１名が専従している。職員が配置され独立した図書室を有する学科は学内唯一である。

2010年８月に数理科学科の36棟から14棟への移転にともない，同じく14棟５階へ図書室，４階へ書庫（雑誌用）を移転した。2015年には５階に書庫（図書用）を増設した。

本稿では，図書室のユニークな部分について紹介する。

図１　36棟当時の数理科学科図書室

2　選書にまつわる環境の変化

図書室資料の選書は図書委員の教員が見計らい方式で行っている[1)]。2003年に筆者が着任した頃，見計らいの対応が可能な数学の書店は３社あった。しかし2019年に１社は廃業，新型コロナウイルス感染症の流行以降にもう１社が見計らいを中止したため，2020年より見計らい図書の提供は１社のみとなっている。他に見計らい図書を提供してくれる書店を探したが，洋書の数学書を取りそろえる書店を確保することはかなわなかった。現在は見計らいと新刊リストのチェックなどによる方法で選書をしている。

36棟に数理科学科があった頃は，図書室と事務室は同室であった。図書室兼事務室には新着雑誌が配置されたピジョンボックスがあり，教員が新着雑誌を見ながらお茶を飲んだり，数学談議をしたりするサロンのような空間だった。分野の違う数学者同士が議論を交わすことで，新しい発想が生まれることもあるらしい。

そこに見計らい図書の棚も置かれていた。書店から持ち込まれたばかりの新刊図書をそれぞれの分野の教員が手に取ることができ，購入依頼（選書）もしていただけた。手に取った図書について，教員より様々な数学に関する話を伺えた。図書室職員に対して専門的なことはほとんど語られないが，その図書の著者である数学者について，資料的価値について，また洋書（原書）の収集や所蔵する意義などについては全て，教員より教わった。原書を収集する理由について，翻訳された資料では著者の微妙なニュアンスが異なって訳されることがあり，著者本人が訳していたとしても母国語で書かれた著作に勝るものは無いとのことだった。教員だけでなく学生にも原書で読んで内容を正確に理解してほしいという教員からの熱い要望が垣間見られた。話を伺いながら各分野の専門教員に選書していただけたことは大きな利点であった。

14棟への移転に際して，図書室は事務室から部屋が独立したことにより，図書室にある見計らい図書

をわざわざ見に来る教員は少なくなった。そのため図書委員が代表して選書を担うこととなったが，網羅的な選書がなされるようになった。ただ図書委員を担当する教員は専門分野以外の選書は難しいと口を揃える。他大学の数学図書室では選定委員会を設けているところもあるが，教員数の少ない本学の数理科学科では選定委員会を設置することは難しい。

一方で学生にとっては，36棟の準閉架式から14棟の開架式の図書室となり，さらに36棟にはなかった閲覧席が設けられ利用しやすくなった。環境が整ったことにより学生（特に学部生）の利用は増え，学生からの購入希望についても図書委員の判断で購入を決定している。

また電子ブック・電子ジャーナルも数理科学科教員により選定され，積極的に購入している。

図２　14棟移転当時の数理科学科図書室内閲覧室

３　請求記号

図書の請求記号を付与するために用いる分類は日本十進分類法（以下「NDC」とする）ではなく，独自分類を採用している。NDCを使用すると全て「数学：410」となるからである。この独自分類は，図書室設立当初に理工学情報センター職員と数理科学科教員とで考えた分類表だと聞いており，アルファベットA～Z（除U，X）24分類で構成され，それぞれに数学の分野が当てはめられている。U，Xが除外されているのは，おそらくUはV，XはYなどの見間違えを避けるためではないかと考える。分類の例として，A：総記，全集・叢書，数学史・伝記，B：論理学・基礎論，C：集合論，D：整数論，E：代数学，群論…，と続く。

NDCの改訂と同じく，独自分類でも新たな分野は随時，分類表に追加している。ただし既存のアルファベットの中に加えていくため，例えばJには３分野（組み合わせ論，グラフ理論，最適化）があり，最適化は2018年に追加された分野である。

分類を付与するのは図書館であれば職員であるが，図書室の場合，職員には数学の専門知識がないため図書委員が付与している。

また著者記号は氏名をローマ字や数字によって記号化したカッターサンボーン著者記号表を採用しており，メディアセンターの請求記号とは異なる体系となっている。

４　図書システム

図書室では，もともと独自の図書館システムを運用していた。その名も「Miss Surie」である。システム名の正式な由来は不明だが，当時の図書室職員とシステム業者が名付けた。立ち上げには大変な労力と時間を要した。

2000年８月にシステム化が決定し，2001年７月に「Miss Surie」が誕生，システムでの閲覧業務を開始した。2002年４月に図書の書誌データ登録が完了しOPAC検索が可能となった[2)]。同時に図書室のWebサイトも立ち上げ，2003年11月よりOPACが外部公開となった。以後，雑誌の書誌データの遡及登録が始まり，2009年に全書誌データの登録が完了した。

ほどなく「Miss Surie」が稼働から10年を経て，リニューアルの時期を迎える。数理科学科単独で維持するには経費がかかり，管理するにも教員と職員の負担が大きかった。しかも，電子資源には対応できないシステムのため，将来的な不安があった。当時の図書委員と主任の教員などが中心となり，2011年７月，ついにメディアセンターのAlephシステムとの統合が決定した。

ところが決定はしたものの図書室は独自ルールで運用してきたため，当初はメディアセンターの貸出ルール（貸出冊数の制限がないこと，延滞金が課されることなど）で運用することに教員からの理解が得られない部分もあった。しかし幾度も協議を重ね，独自ルールをAlephへ適用しようとすると莫大な経費がかかること，総合的に考えるとメディアセンターの貸出ルールで運用することは，双方にとって利点があるという結論に至った。その後のシステム統合作業のプロセスは表１の通りである。

貸出ルールの変更による混乱もなく，現在に至っている。数理科学科教員のご理解と当時のメディアセンター本部，理工学メディアセンター職員の多大なる尽力により，安定したシステム運用と利用者サービスが実現した。

表１　システム統合プロセス

年　月	統合作業プロセス
2012　8	Miss Surie雑誌所蔵データの抽出
9	カレント雑誌の書誌データ遡及開始
2013　1	Miss Surie図書書誌・所蔵データ，貸出データの抽出
2	固定データ（所蔵と簡易書誌）21,104件をAlephに搭載
3	カレント雑誌234誌の書誌データの遡及登録完了 Miss Surieでの運用終了
4	理工学メディアセンターの規則でAlephによる貸出開始，雑誌新規受入開始 ILLは謝絶（複写ILLは対応） 図書書誌データ遡及作業開始
2015　1	図書書誌データの遡及登録完了
2016　4	学内ILLへ数理科学科図書室組込み 学外は複写ILLのみ
8	ノンカレント雑誌約390誌の書誌データ遡及開始
2018　12	全データ登録完了

5　日本数学会交換雑誌事務局

図書室は1979年10月より，日本数学会交換雑誌事務局としての役割も担っている。日本数学会が発行している雑誌を国内外の諸大学・研究所発行の雑誌と交換している。交換雑誌約200タイトルを受入れ，日本数学会会員の閲覧希望に応じることになっている。

6　テキスト展示

数理科学科３年生に向けて，所属研究室選択の一助になればと2018年よりテキスト展示を実施している。図書室内閲覧室の書架に研究室のゼミや輪講などで使用される予定のテキストを10月～11月に約２週間展示している。学生は展示を通して，希望する研究室でどのような研究がされているかを事前に図書で確認することができる。また図書室学生スタッフによる研究室紹介などの手作り冊子も不定期に発行して，展示期間にあわせて配布している。

7　おわりに

慶應の学生や教職員の間でも，数理科学科図書室の存在はあまり知られていないのではないだろうか。システム統合後は，KOSMOSの配置場所として表示されるため少し認知されるようになったが，それでも数学と関係のない他学部の方々は，本稿ではじめて知ったという方もあるように思う。

小さな図書室ではあるが，図書館の業務が凝縮されていて，職員は広範囲な業務（テクニカル・パブリックサービス，図書室独自の業務）を担当している。嘱託職員が４年の任期で交代したとしても，利用者に対して安定したサービス，またさらにより良いサービスを提供するべく努力している。

大学職員は教員・学生の研究や学習のサポートをすることが使命である。ただ筆者の場合，実際にはサポートするよりサポートされたり教えていただいたりすることが多く，一人の職場でありながら，一人では何もできないと実感することばかりだった。システム統合しかり，36棟から14棟への移転しかり，日常業務もしかり。多くの教職員の方々の協働と，支えのおかげで現在の数理科学科図書室があることを，改めて深く感じている。

図３　現在の14棟数理科学科図書室内閲覧室

注・参考文献

１）出版情報などをチェックしてから発注するという手間を省くため，収書方針などに照らして，あらかじめ書店に一定の範囲を示し，納品された資料をチェックして採否を決定する資料購入方法。
日本図書館情報学会用語辞典編集委員会編．図書館情報学用語辞典．第５版．東京，丸善出版，2020，p. 238.

２）入田悦子．たとえば図書システムの立上げ ―私のアイデンティティ，数理科学科図書室―．MediaNet．2003，no. 9，p. 39.